

11月号

School Aid Japan

スクール・エイド・ジャパン

Dream通信

2013. 11. No.68



新たな旅立ち、それぞれの道 2013年度秋季SAJツアー開催



合格発表を受けて喜ぶスレイノイ

皆さん、こんにちは。日本では、肌寒さを感じる季節でしょうか。こちらカンボジアでは、乾季から雨季に変わり、暑さの厳しい季節を迎えようとしています。

今回のDream通信では、10月から新たなスタートを切った子どもたちのこと、そして2013年度秋季SAJ教育支援視察ツアーのお客様をお迎えしたことの2つをお伝えします。

卒業後の進路

新学期に入る10月、園を出て、それぞれの道に進んでいくことを決めた子どもが3人います。

1人目は、これまでも皆様にお伝えし、たくさんの方々から応援をいただいていたナウ・スレイノイです。9月28日に、プノンペン大学日本語学科の入学試験がありました。試験3日前にプノンペンへ出発し、願書の提出や試験会場の下見などをする合間にも勉強を続けました。試験前日の夜まで準備を行い、当日には園の子どもからの寄せ書き入りのTシャツを制服の下に着て、試験に臨みました。試験を終えたスレイノイは、「勉強したところが出た！」と手ごたえを感じながら、「でも難しかった」と不安な表情で教室から出てきました。結果発表までの10日間ほど、子どもも職員もドキドキしながら過ごしました。結果は見事合格！すぐにプノンペンに引っ越し、現在はプノンペンにあるSAJの事務所で寝泊りし、そこから大学に通っています。

また、中学校を卒業した子どもたちの中にも、新たな道を選んだ子どもがいます。ノン・サオルアンは、育ての親である祖父母が病気で働けない状況になってしまい、家を支えるため、帰ることに決めました。勉強はあまり得意ではありませんでしたが、人一倍の努力家で、小さい子たちの指導や保母担当のお手伝いなど、何をするにも一所懸命取り組んでくれる子でした。相手の気持ちを第一に考える、思いやりのある子でした。何度も話し合い、サオルアンの気持ちを確かめた上で、とても残念でしたが、家に帰すことになりました。サオルアンの妹、弟の2人は園に残ります。2人は、姉の分も勉強を頑張り、将来は



祖父母のために家に帰ることを決めたサオルアン



SAJ Farmで働くことを決めたパーリー



新高校1年生8名

2人で姉を支えると約束をしました。

スローン・パーリーは、高校進学のため「中学3年終了時の成績がクラスの半分以上であること」を満たしていませんでした。また、本人も高校の勉強についていく自信がないということで、新たなステージを探すことを希望しました。そして、何度も話し合いを重ねた結果、まずはSAJ Farmで研修生として働くことに決めました。研修生として半年間、SAJ Farmで働く間に、自分が将来何をしたいのかをしっかりと考え、研修が終わった後には、SAJ Farmに残るのか、それとも新たな夢に向かって頑張るのかを話し合います。

3人の生活はこれまでと大きく変わり、これからは自分のことは自分で責任を持ち、自分で解決していかなければいけません。三者三様の卒業となりましたが、それぞれ立派な大人になって、園の子どもたちの見本となって欲しいと心から願います。

同時に、8人の子どもたちが、高校へ入学しました。成績がぎりぎりという子も中にはいます。事務局長から贈られた新しい制服を着て、気持ちを新たに、今まで以上に勉強し、途中で諦めず、高校を卒業するのだという決意を胸に、毎日学校へ通っています。高校に進学することを当たり前のことだと思わず、常に里親様、支援者の皆様への感謝を胸に、卒業までの3年間で自分の将来についてしっかりと考えて欲しいと思います。



歓迎の踊りでお客様をお出迎え

SAJ教育支援視察ツアー

10月22日、23日、2013年度秋季SAJ教育支援視察ツアーが開催されました。

22日には6人の子どもの里親様やご家族様、複数回ツアーに参加していただいているお客様が来園されました。子どもたちは見知った顔の方々ばかりで安心し、目一杯遊んでいました。

今回が初めての里親様との対面となったメーン・テッドは、最初こそ緊張していましたが、一緒に昼食を取り、通訳を介して話したり一緒に遊んだりしているうちに、とても仲良くなる事が出来、帰り際には「また明日も来るよね？」と何度も聞いていました。

23日には、ツアー参加者様全員、総勢16名の方が来園されました。この日は伝統舞踊と楽器の披露をしたり、自慢のグループ農作業の農園を案内したりと大忙しでしたが、短い時間の中でもそれぞれに楽しい時間を過ごすことが出来ました。

遠い日本から来ていただいたお客様との触れ合いを通して、子どもたちはたくさんの刺激を受けることが出来ました。カンボジアでは知ることの出来ない遊びや知識などを知ること、もっともっと日本について知りたい、と思うようになりました。この気持ちを忘れずに、将来は日本とカンボジアの架け橋となれるような立派な大人になって欲しいと思います。



未知の計算道具、そろばんとの出会い



里親様との触れ合い